

今井俊介

元裁判官、現弁護士  
元兵庫大学教授

◆「方丈の庵」を訪ねてみませんか

ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつびて、久しくとどまりたる例(ためし)なし。世の中にある、人と栖(すみ)かと、またかくのごとし。

今から 60 年前、高校で「奥の細道」、「徒然草」、「源氏物語」等と並んで学んだ鴨長明の「方丈記」の出だしである。5 つの生き地獄(安元の大火、治承の辻風、突然の遷都による人心の荒廃、元暦の大地震、養和の大飢饉と疫病)を経験した長明にはどうてい適わないものの、長明の文体には若いころから親しみを覚えていた。社会を観る鋭い眼力、小気味良い文体・・・以来この本を一時たりとも手元から離すことなく、要所要所の文章は空で言えるくらいになっている。

長明よりも長く生きながらえている自分ではあるが、(無情)の意味が少しわかりかけてきたように思う。

長明は下賀茂神社の禰宜の地位に就くべきものであったが、父親が死去し身内の紛争があつて身を引き、日野山の奥に仮の庵を作り、1 人住まいを始める・・・組み立て家具材料は、台車 2 台であったという。

「方丈」とは 3 メートル四方、今で言う 4 畳半の間である。その中に経机、その上に法華経經典、壁に阿弥陀仏、普賢菩薩の絵像、寝床(わらびの穂)、琴・琵琶の楽器があり(「起きて半畳、寝て一畳」)、自分ひとりの住処としては何の不足も無く暮らした。

四季折々の自然環境に恵まれ、遙か遠く下のほうに京の街が臨める。山のふもとに番小屋があり、そこに 10 歳になる男の子がいて気があって一緒に野山を散策し、食料のための野草を採取したりして童心に返っている。

自分の命は天に任せ、四季折々の美しい景色を味わって、誰に気を使うことなく文学と音楽の優雅な生活に没頭している。「愁え無きを愉しみとす」・・・なんとも優雅である。フリードリッヒ大王の建てたサンソーシ(Sanssouci)宮殿もフランス語で「愁え無き」宮殿という意味である。

しかし仏は、長明にお前の心は欲望に染まったままだ、何事においても執着心を持つてはならない、と言われる。そうすると「今、この仮住まいの小家を愛するのにも罪となるのか?」どう考えたら良いのだろう。こんな極限的な生活で、自分がそれで良いと言っているのに仏はそれでもなお許されないのか。長明は自問しながら途方に暮れる。自分の舌に返答を任せた。すると舌は自然に動いて「南無阿弥陀仏」という念仏が口から

出た。これは仏に対する請い願うことの無い無心の境地から出たものである、と答えている。

この夏私は京都下賀茂神社に復元された長明の庵を觀に出かけた。酷暑の中、静かなたたずまいで、設計文どおり見事に復元されていた。物陰からふっと長明が現われたような気がした。

「長明さん仏のお諭しをどう考えておられるのですか。俗っぽい私に教えてください。」

「・・・執着心を捨て・・・ただひたすら念仏を唱えなさい・・・・・・・・・・」

(庵は、京阪電鉄「出町柳」駅下車、高野川沿いに北上し、札の森、京都家庭裁判所を過ぎ、広い下賀茂神社境内に入ったすぐ左側の小さな社の境内に復元されている。一度是非訪ねてください。)

#### 参考

マグニチュード7.4と言われる元暦の大地震について

「そのさま、よのつねならず。山はくずれて、河は埋(うず)み、海は傾(かたぶ)きて、陸地(くがち)をひたせり。土烈(さ)けて、水涌き出で、巖割れて、谷にまろび入る。なぎさ漕ぐ船は波にただよひ、道行く馬は足の立ちどをまどはす。・・・恐れの中に恐るべかりけるは、ただ地震(なみ)なりけりところぞ覚え侍りしか。」

海が傾いて海水が陸地に迫り、浸したという「つなみ」の描写・・・当時一いまから800年前一の人としてはあまりにもクールでリアルです。

地震の恐ろしさをこれほど鮮明に伝える文章に接した事はありません。